五月作品

☆今月の四人☆（小島ゆかり選）

ああ

影山一男　千葉

SNSがSOSへと変換すけふも誰かが死を考へて
暇老人われが作りし戯れ言よ「老いては事を仕損じる」ああ
見えぬもの聴こえぬものの増え来たり風受け歩む川筋の道
某国の大統領を狙撃せよ命じたし「ゴルゴ13（サーティーン）」あらば
パワハラを競ふ二人の男ゐてボルシチを飲む笑ひつつ飲む

反抗期

福士りか　青森

語りたきことあれば本に語らせる父なりきわれが十五になるまで
中学生われが新書を読みゐると父よろこべば新書のみ読む
ぶつからずすれ違ふこと得意にてそれだけのことわが反抗期
地平線なきいちめんの雪のはら白鳥のこゑもすがたも真白（ましろ）
知らぬ間に雪にまじれるものなきか白鳥のはねマーシャルの灰

月集スバル

祖母になりたし

田中愛子　埼玉

家苞（いへづと）のあんまん温くいつもより声やはらかくただいまを言ふ
カルピスを切らした冬のれいざうこ青のひかりのことに寒ざむし
保育園の朝（あした）の庭に流れゐし「ユーモレスク」は今でも苦手
ひとりゐのこたつで食べる羊羹の甘さひかへめを少しさびしむ
ゆふばえの空をゆつたり雲ながれ母はともあれ祖母になりたし

カボチャの花

橘芳圀　新潟

死後の世を信じざれども死者たちはをりに立ちきてわれをはげます
いかに生くべきかを問はれ生きてきていかに死ぬかをこのごろ問はる
人の死に経誦みにゆくかなしさをなぐさめくれきカボチャの花が
あやまちをせずに過ぎきし男らはその死に際におほよそ悔いむ
万物のみなに嫌はれゐるはずのにんげんのみが死後のこと言ふ

☆　☆

水島晴子　兵庫

少年となりてボールを蹴るすがた向かひ家の子が見えて夕ぐれ
目が合へば微笑むまたはくわんぜんに無視する　今日はいづれかこの人
〈停波〉とふ――おもたき二文字（ふた）が落書きされしと塀のおもてに
「知っている彼とはちがう」さびしげに夫つぶやくニュースを観終へ
発熱の三日平熱の二日経て夫婦喧嘩するも儀式のやうに

高野公彦　千葉

ビル街の夕焼ぞらの遠方（をちかた）に富士の影見ゆ山つみの影
一円玉7個出すとき1個落ちて拾ひくれたる人ありレジ前
転ぶのは老いの証しといふ説がまだ転ばない我を励ます
転ぶのは地球を愛撫する仕種、だから高野よ転んでも良し
蜜柑、梨、杏、桃、栗　寒き日を樹木図鑑で果樹林散歩す

奥村晃作*　東京

本態性血小板血症が悪化してショックで鬱（うつ）病を発症したり
歩行器にすがりて家のめぐりをば一めぐりして日向ぼっこす
歩行器の座席に坐りきさらぎの直射光をば全身に浴む
夜（よる）眠り昼また眠く眠り継ぐわれは一体どうなってるの

森重香代子　山口

しっかりと手摺にすがり早朝の階段くだる老深まりぬ
絶え間なく左右に揺れてわが体軀何処か病むらし去年の秋より
痛む背を左右に揺りつつ耐へてをりをととひの日もその前の日も
をりに差す陽があたたかし日すがらのつけつぱなしの暖房よりも
テレビいま観るものでなく聴くものぞ点けつ放しのわが家のテレビ

桑原正紀　東京

猫を飼ふには遅すぎる齢となり春めく風に顔吹かれをり
先立つも先立たるるも無縁なる天涯孤独のすずしさを愛づ
をりをりに来る野良猫が甘ゆれど猫かはいがりせずかはいがる
背をすこし反らしてスマホ見るヤツの茶髪がわれの顎をくすぐる
スマホ見る隙間をすこしづつ作りスマホラッシュとなりゐる車中

狩野一男　東京

梅見かな芦花公園をうろついてしまひには蘆花恒春園へ
いづこにも梅の花咲くきさらぎの千歳通りは救急車道
たたかひやいぢめ無きとき来るならむつまりこの世の無くなる時が
「婦系図（をんなけいづ）　湯島の白梅」思はせず芦花公園に咲けりしらうめ
白梅の花のさかりとなりにけり「しこたま」といふ純米酒をば

宮里信輝　神奈川

雪富士に今年の元気もらひたり吾妻山（あづまやま）公園山頂に来て
富士山は３７７６ｍ　めぐりの山は１７００以下
富士山に数回われは登りたり元気あふれる若かりし日に
富士山の頂上は深き火口なり再び噴火することあるな
今いちど機会があらば登りたし身体鍛へんその日のために

小島　ゆかり　東京

ストレッチャーの母はわれのみ見つめつつ口の形がごめんねと言ふ
医師の手がゆつくりと母の瞼閉ぢ　わたしは長い夢から覚めた
もう開(あ)かぬ眼は涼しさうひとり子のわたしを見つめすぎた母の眼
医療器具すべてはづされ水底のやうな遠さの母を見てをり
ははへこれが最後の贈り物だつた退院用の春の靴下

木　畑　紀　子　京都

おもひでを詰めて「箱ごと焼却」と書いて二箱まだ積んでおく
あらかたの枯れ葉は風が掃き尽くし芽吹きまつまで苑は簡浄
急坂といふほどならね息切れてひと月まへより脚弱りをり
最短の散歩コースをめぐり終へけふの成果の五千歩を褒む
団塊といふ時代の子老いにけりつひに競争は苦手のままで

島　田　　暉　神奈川

春野原冷たき風の吹き荒れて煩悩なんて叩きこはさる
死は前にあらがひがたく待つゆゑに生き継ぐひと日ひと日は戦(いくさ)
駅舎より一本の道とほりたり勤めし日々の死に顔暗し
温床に赤くかがやく春の薔薇自家中毒のやうに笑へる
賽銭を投げてこの世を祈ります平和の停戦続けよ続け

大　松　達　知＊　東京

ばしゃぐわ、と雨は落ちつつドラセナに水道水を2秒与える
キモ、キモい娘が言ってエグ、エグいわれが言いたり祓(はらえ)のごとし
ゆうどきの亀は火星を止めるようにちいさいちいさい吃逆(きつぎゃく)をする
殴殺のシーンに慣れて万引きのシーンに怯むぶるる、ぎゅうっぐ
拗れたり拗ねたりしつつ人生に遺灰のような蕎麦粉を捏ねる

田　宮　朋　子　新潟

パスワード、ＩＤ入れて図書館の奥の奥なる本にちかづく
パソコンの画面に昭和十年刊「多磨」六号の「悲歌」を呼び出す
ざつくりと本の喉切りスキャンして電子書籍化せしといふ人
度のつよき眼鏡の人よ図書館に四十余年勤めしといふ
猫目石嵌めたるやうな眼の猫がエジプト坐りしてこちら見る

津　金　規　雄　神奈川

四季わけても早春のわが散策路　色よりも香に歩をとどめらる
正であれ負であれ過去は財産と思ふこのごろ蠟梅ひらく
しだれ梅の白きパラソルおほらかに咲き満ちてをり香をこもらせて
地に近く飛びゐる蝶のちひささよ空の高みを知らずして生く
ひれ長く泳ぐエンゼルフィッシュの水やはらかし春の陽に透く

小　山　富紀子　京都

春はまだ山の奥なる湯の宿の木々渡りゆく風素つ気なし
梢の雪落として一羽立ちしあとまた雪となる峡の湯の宿
うたたねにほつれし髪をなほしてもせんなき独り峡の湯の宿
雪止まぬ窓辺に立ちて背に聞く春待つ里のまつりのはなし
粉雪はあわゆきとなり湯の宿の長き廊下に灯のともりそむ

清　水　正　子　神奈川

姥われの冬のアイテム衿もとにワインカラーのジャワ更紗巻く
クリニック帰りの歩みふと止めぬああ蠟梅の香りただよふ
蠟梅は蕾のときも咲くときも枝に貼りつく怖がり屋さんです
千切りも千六本も同じこと誤差のやうなる六本が可愛い
寒い日はおでん煮てます老い夫の好きな竹輪麩を早目に入れて

藤野早苗　福岡

膝丈のストッキングで膝の裏かぶれてつくづく老いたなわたし
十八年ともに暮らしたのみなれば叔母の語れる母を見知らず
手に包むソイラテカップ　まるごとの母を愛せただらうかわたし
たらちねの中陰明けし冬の夜半氷のやうな悲を飲みくだす
パソコンのキイボードに身を投げ出してハラスメントする猫と闘ふ

風間博夫　千葉

「あちこち」は「彼方此方(あちこち)」と書く「おちこち」も「彼方此方」と書く　インフル流行(はや)る
右利きであるとも右手の爪を切るために〈爪切り〉左手に持つ
空き缶を空(から)の袋にひとつ捨てふたつ目捨てればカシャと音する
ひと垂らしラー油を垂らすたらしたらしたらし小瓶のくれなゐの消ゆ
北に見るマンションの窓あさの日をかへして真つ赤真つ赤つ赤つ赤

小島ゆかり著書二冊

はるかなる虹　第十六歌集 コスモス叢書第1236篇
令和6年7月刊　三〇〇〇円(税別)　送料三〇〇円　短歌研究社

サイレントニャー　猫たちの歌物語 コスモス叢書第1241篇
令和6年8月刊　一八〇〇円(税別)　送料三〇〇円　短歌研究社

連絡先　〒112-0013　東京都文京区音羽一―一七―一四
音羽YKビル　短歌研究社

奥村晃作歌集
蜘蛛の歌　コスモス叢書第1232篇
令和5年12月刊　二六〇〇円(税別)　送料三〇〇円　六花書林
著者住所　〒175-0092　東京都板橋区赤塚七―一五―一六

大松達知歌集
ばんじろう　コスモス叢書第1233篇
令和6年1月刊　二五〇〇円(税別)　送料三〇〇円　六花書林
連絡先　〒170-0005　東京都豊島区南大塚三―二四―一〇
マリノホームズ1A　六花書林

高野公彦評論集
歌の魅力の源泉を汲む　コスモス叢書第1235篇
令和6年3月刊　二八〇〇円(税別)送料三〇〇円　柊書房
著者住所　〒272-0114　千葉県市川市塩焼二―二―二―五〇六

斉藤梢歌集
青葉の闇へ　コスモス叢書第1237篇
令和6年7月刊　二三〇〇円(税別)　送料三〇〇円　柊書房
著者住所　〒982-0831　宮城県仙台市太白区八木山香澄町
二一―一〇―三〇六　薄葉様方

水上　比呂美　東京

をさなごは前へではなく奥へ奥へ絵本の森をくぐりてゆけり
小さきものつまんでわれに見せにくる坊やは「枕草子」の雅児よ
をさなごはいきなり〈後ろもたれ〉してこけてしまふよフレイルのわれ
ひろ君と坊やのペアのニット帽、大そら豆とそら豆の風情
冬晴れの知らない道を漕ぎゆけば手漕ぎボートのやうな自転車

鈴木　竹志　愛知

しんがりが我に相応ふと思ひつつ最近それもなんだかなあと
責任感などではなくてただ単にしんがりなるが心地良いのだ
しんがりが知るべきことはただひとつ背後より来る敵の動静
しんがりを今日も務める夕べ来て背後の敵をしかと確かむ
敵なんてほんとはゐないみんなみんな幻だつたしんがりの夢

原賀　瓔子　東京

医師もまた休んでほしい仕事なれど年末年始に病はおこる
鼓膜なきわれの中耳を医師(くすし)とし覗いてみたい痛む夕べは
点耳薬、手帳、ゼムピン、生活の卓になじめず砂時計あり
三分のじかんのなかで畢はりたるシャンソンのやうな砂時計の砂
冷凍に使つた輪ゴム捨てませう　弾力のないものはだめです

水上　芙季　神奈川

一年前の吾子が全く違ふ顔してゐてそばでクロノス笑ふ
どつしんぽん絵本のこぐまちやんのごとボールにぶつかり尻もちつく子
父と子で〈破壊遊び〉を受講して何も壊さず帰つて来た子
ホームから見上げた空は細くつて　今日もポン酢を買ひ忘れたり
ビー玉が体の裡を転がつて〈明日〉でほんとにいいのかと問ふ

大野　英子　福岡

白蝶が無数に舞つてゐるやうなこの雪が北の人苦しめる
海風に横殴りとなる雪のなか取りのこされた自転車一台
この冬は逝くひと多くたそかれの波間に立ちて消ゆるたれかれ
老病の苦からのがれて亡き人に残らん愛する人への思ひ
ストラヴィンスキーの「春の祭典」聴きながらむしやうに行きたし父母(ちちはは)の墓

松尾　祥子　東京

酒酌めば少年少女に戻りたり幸麗(かうれい)者などとうそぶきながら
孫、介護、離婚、独居が話題にて中学時代は前世のごとし
姉夫婦転居し娘家族棲み世代交替するなり家も
屋根壁を塗装し礼(ゐや)す増減のあるこの家族守り来たる家
をさな子を抱きて眠れば広やかな海泳ぎゆく鯨となりぬ

鈴木　千登世　山口

紺藍の糸染め上げし指もて生む蚊絣の星座早見表(プラニスフィアー)
結ふ通す掛ける引く裁つ　いにしへの作法そのまま張る経の糸
蚊絣を織る窓の外(と)を狂ほしく最強寒波の風雪(かざゆき)が舞ふ
舟形の杼を滑らせて機織りぬこゑもことばも〈時〉にあづけて
しんねりと白き十字を織りゆけば外の闇に浮く雪の蚊絣

小島　なお＊　東京

入らない、と思うたび渡される花　祖母を埋(うず)めて浮きあがる母
母の母の柩を運んでくれたので母はあなたを大切にする
受精卵凍らせたまま向かい合う火鍋に沈む当帰(とうき)を掬う
望まない君の願いも叶うべき九龍城(クーロンじょう)はもうないけれど
戦士達と意訳をされる菫なら、ひとりで産もうこの草原で

小田部　雅子　静岡

天浜線窓の野づらに名画座でいつか見た道、老婆の後ろ
熊ならん猪ならん森に入る汽笛異様にけたたましけれ
無人駅寸座でひとり降りゆきし老ナルキッソス枯れ野に消えぬ
秋野不矩「ガンガー」黒き水牛の頭たくまし太き息みゆ
九十一歳その小軀もて大画面たたき出だせり生命の河を

斉藤　梢　宮城

木の枝の揺ればかり見てる冬の夕　心をどこか遠くに置きて
わかりにくい歌を詠んでた若き日のわれの心は抒情の深海
咲ききりて花咲ききりて如月のこの世に何を残したらう
新しい外灯は銀の〈のつぽさん〉小さな雪に話しかけてる
執着を手放したくてばふばふと冬の団扇の力を借りる

うたを味わう―食べ物の歌　◉ 高野公彦

昆布の味　―北の海の幸―

味出してのちゆたかなる一枚のくろき
昆布を引き上げにけり
木畑　紀子

昆布には、出し用と煮物用がある。煮物用の昆布は、煮付けたりおでんのタネにするほか、昆布巻、佃煮昆布など、いろんな加工食品がある。

出し用は、文字どおり各種の料理で出しに使われる。たとえば土鍋で湯豆腐をするとき、鍋の底に昆布を沈めてゆっくり煮て、それから豆腐を入れて煮立たせる。こうすると、昆布の出しが効いて、うまい。

右の歌では、どんな料理なのか不明だが、これも出し用の昆布である。煮られて役目を終えた昆布が、静かに鍋の底に横たわっている。つゆは透明で、かすかに琥珀色を帯びている。これから料理に取り掛かるわけだが、作者は養分を出しきった黒い昆布を美しいと思い、しばし眺めている。自分の全てを他者のために投げ出したものの美しさ、豊かさを、作者は昆布から感じているのだろう。歌集『女時計』より。

昆布はマコンブ、オニコンブ、ナガコンブなど多くの種類があるらしいが、ふつうは産地名を付した羅臼昆布、日高昆布などの名で呼ばれる。利尻昆布は種類名であると同時に、産地名による名称でもある。これらの名から分かるように、昆布は北の海で取れる。年じゅう出回っているから季節感は薄いが、海で採取するのは夏なので、「昆布」は夏の季語となっている。

江戸後期の船乗り・高田屋嘉兵衛の一生を描いた司馬遼太郎の長編『菜の花の沖』の中に、昆布の話が出てくる。嘉兵衛が、船で大坂から関門海峡を経て、はるばると日本海回りで蝦夷まで行き、鰊や昆布を買ってくるのである。海上に「昆布の道」があったのだ。

（『うたを味わう』より再録）